



タイトル Title	享保時代の江戸俳壇 和推(二世調和)の動向
著者 Author(s)	松尾, 真知子
掲載誌・巻号・ページ Citation	國文論叢,21:1-9
刊行日 Issue date	1994-03
資源タイプ Resource Type	Departmental Bulletin Paper / 紀要論文
版区分 Resource Version	publisher
権利 Rights	
DOI	
JaLCDOI	10.24546/81011786
URL	<a href="http://www.lib.kobe-u.ac.jp/handle_kernel/81011786">http://www.lib.kobe-u.ac.jp/handle_kernel/81011786</a>

PDF issue: 2021-04-15

# 享保時代の江戸俳壇 和推（二世調和）の動向

松尾真知子

和推は、調和門であり、後に調和の点印を付属され、二世調和を襲号する宗匠である。和推は、享保期江戸俳壇において重きをなすというような人物ではないが、調和門から沾徳一派に接近して、自己の俳諧活動の基盤を築くことに成功した。そのような和推の動きは、享保期江戸俳人の一つのあり方を示すと思われるのでここに取り上げた。以下において和推の俳諧活動を明らかにし、どのように主流勢力に組み込まれていったのかについて検討したいと思う。

## 一

芭蕉没後の江戸俳壇では、蕉門の其角及び風雪、露沾門の沾徳、前句付俳諧の中心的人物である調和などが主要俳人として数えられる。とりわけ其角は洒落風の祖とされ、江戸俳壇に大きな影響を及ぼす。

「享保期江戸俳壇の主流は、其角系と沾徳系の合流した其角流とも言われる洒落風の俳諧であった」<sup>(注1)</sup>ことは、俳諧史上正しい認識であると思われる。当時各門の俳人が比較的自由に交流してい

たことは認められるものの、それがはたして其角中心の「無対立の統一」<sup>(注2)</sup>であったのだろうか。一見自由に見える交流の在り方には、一定の規則性があるように思われる。

『鳥山彦』（沾涼編 享保二十一年）に、

元禄のすゑに晋子其角、洒落俳諧といふ付合の一鉢を起す。岸本調和・河曲一峰・大野秀和・岸本子英等の宗匠合鉢して「当時の洒落と云俳諧は謎字の鉢に似て、しかも一句の訣別なし。当流正風鉢と云は是に過べからず」と『つげの枕』と云書を編す。北藤浮生『原俳論』といへる小冊を以其返答をして、正風を化鳥はいかいと誹謗しけるより、華江の誹諧二流にわかれぬ。

とあり、宝永四年を境として江戸の俳諧が二分されたことが記述される。洒落風と化鳥風の対立については既に論ぜられてい<sup>(注3)</sup>るが、それは師の系譜に拠った門流意識に基づく対立ではなく、俳風の対立である。すなわち古くからの式目を無視しても作意を工夫して「珍作」を求める革新派（洒落風）と、それを放埒と受け止めて貞門時代以来の式目を守ろうとする保守派（化鳥風）の

対立であると考えられる。

『作良会佳喜』（享保八年成 聴雨編）に、

当世悉しやれに成る。此故に何も知らぬ者も、百韻五十韻の  
仕方少斗習ひ、月花はいくつ有物と知るやいなや、其儘しや  
れ仲間秀才と呼ぶ人の心誠に危哉。今実正鉢の宗匠多くう  
せて廃れなん処に、唯不角有て正風の詞鋒僥す。

とあるように、両者の対立は圧倒的に洒落風が優勢であり、一方  
化鳥風側は、享保時代には不角を除いて化鳥風の俳人が没し、そ  
の影響は僅かであった。当時の江戸俳壇においては、洒落風に吸  
取される動きは認められるものの、洒落風から化鳥風への移動は  
見えず、自由に交流していたのは洒落風の間だけである。

和推の場合は、師である調和（化鳥風）ではなく、それに対立  
する沾徳（洒落風）に従った点が指摘できる。このような和推の  
動きは、「武城の俳諧は大卒二筋にわかれて、しやれと云ひ化鳥  
と云」（『鎌倉海街』千梅編 享保十年刊）われるような二分され  
た状況にあつて、化鳥風から洒落風に転換した動きとして注目さ  
れる。それは、俳人の動きの規則性（化鳥風から洒落風へ）を明  
示するものである。同時に、洒落風から化鳥風に移る動きが見い  
だせないことを含めて考えると、いかに洒落風が受け入れられて  
流行していたかを裏付けることができる。

しかしながら、洒落風の難解さを批判することは依然としてあ  
る。また調和門人調柯が、「時雨の話」という俳文の中で、

昔壺瓢軒の遺訓にも付句は楊弓の矢のごとくにせよと、物に  
相對の道理を以いへる心を斯「風寒しねらふたる矢の落所」

爰にして思ひ出たり（『茶話稿』竹郎編 享保二十年）

と調和（壺瓢軒）の教えを述懐するなど、僅かではあるが、調和  
の末流が江戸俳壇に息づいていることは事実である。そのような  
調和系の動きを見逃すべきではないと思う。

和推が調和（二世）を名乗ったことにより、洒落風から調和風  
に回帰したことを意味するとは考えないが、「調和」と改号した  
場合、和推にとつて有益性があつたものと思われる。第一に、調  
和の前句付点者時代を含めた知名度が挙げられる。ここに俳風と  
俳系の不連続が生じるのであるが、このことは、当時にあつては  
問題とされず、承認された事象であつたと思われる。

前述したごとく宝永四年以後江戸の俳諧が二分されるのである  
が、従来看過されてきた宝永四年以後の調和と沾徳の関係を指摘  
しつつ、和推の俳諧活動を検討し、享保期江戸俳壇の特質につい  
て言及したいと思う。

## 二

和推は、堀尾氏、別号敲柳堂、本芝に住む。「江都宗匠」の項  
（『綾錦』享保十七年 沾涼編）に、調和門として「和推 堀尾  
敲柳堂、先師点印ハ伝松曉林和葉、自和葉又和推附属ス」とある。  
和葉は、正徳五年（一七一五）調和が没した後、調和の遺稿をま  
とめた『これまで草』（享保五年）を刊行した調和門人である。  
和推は、調和から直接に点印を譲られたのではなく、和葉を経由  
して附属された。

「綾錦後宗匠并変名の宗匠」の項（『鳥山彦』享保二十一年  
沾涼編）に、「前和推。続師表徳改調和。享保十八丑春」とあり、  
享保十八年に調和と改号した。『かなあぶら』（享保二十年 米仲

編)には調和(二世)の画像が載る。

没年については『誹家大系図』(天保九年 春明編)に「寛保三年没。行年詳ナラズ」とあり、一七四三年に没したことがわかる。享年は未詳であるが、和推の作品が『二葉之松』(元禄三年成)に初出するので、少なくとも五十四年以上は生存していたことが確認できる。

和推の著作としては、享保十年(一七二五)と享保十一年刊の歳旦帳が現存する。歳旦帳を刊行するということは、和推の門人の存在が考えられるので、その頃までに一門を構えていたと推測できる。また享保六年(一七二二)から七年にかけての桂山舎月次句集に和推の点が見える。

### 三

次に和推の俳諧活動を中心にまとめた年譜にもとづき和推の動きを明らかにしたいと思う。

和推の作品が最初に収録されるのは、『二葉之松』である。同書は、不角の前句付月次高点句集の第一集であり、元禄三年(一六九〇)正月から十二月までの分を収録する。そこに和推は六句入集する。しかし『二葉之松』以後和推は、調和や不角などの前句付俳諧に投句する例は見当たらない。

元禄三年から元禄末年(一七〇三)に至るまでは、和推の活動範囲は調和門の中に限られていたと思われる。しかし宝永期に入ると、調和門以外での活動が始まる。宝永二年(一七〇五)刊『安達太郎根』(渭北編)に発句三句入集する。編者の渭北は其角門で、後に淡々と改号する。『安達太郎根』に調和の作品はな

く、調和門では艶士が入集する。

宝永二年刊『余花千句』(沾徳編)は、百韻を十巻収めたものであり、そこに一座する連衆は、沾徳系をはじめ、其角系、嵐雪系などの寄り集まりである。和推は彼らとともに七巻の百韻に一座し、これを契機として沾徳一派に接近していく。

沾徳が江戸俳壇を統一することは、其角生前の「宝永二年において確定」<sup>(註)</sup>しているが、いま一度『余花千句』に注目したいと思う。

『余花千句』には句の上に沾徳の頭注が記されているが、十巻目の挙句の頭注に次のように記す。

畢竟千句ハ江戸におゐて始めて興行する処也。国々の俳風ミナ江都の風を宗とする故、附心の遠近、一句の景物、一卷の句並、大概にあらハす物也。

ここには江戸の俳風が、諸国の模範となるという自負が読み取れる。刊記は「宝永弍乙酉年七月下旬 京寺町二条上ル町 井筒屋庄兵衛板」とある。沾徳は、この年の五月に上京し、九月末江戸に戻る。江戸ではなく、わざわざ京都に向いて刊行している。

そこには京都をはじめとした諸国に「江都の風」を示そうとする積極的な姿勢が表れている。その背景には「国々の点師もみな江戸の風俗をうかゞひて、ふりを出すやうに成」<sup>(註)</sup>『花見車』元禄十五年 轍士編)るといふ時代の風潮があったことが推測される。

以上のような『余花千句』に和推が参加できたということは、沾徳を中心とする勢力に組み込まれたと考えられる。

沾徳が江戸俳壇の中心的存在となる一方、調和は前句付点者をやめた。すなわち調和は、宝永二年正月までの勝句を収めた『新

身附研上」をもって前句付から引退し、「調和の勝句集の板行は恐らくこれで終止符を打」った。このような調和の動きが和推に影響を及ぼしたのではないだろうか。時代は沾徳の指導の下に新しい俳壇の編成が進行していた。

和推が沾徳に接近した理由は、第一に沾徳が当時の江戸俳壇の中心的人物であった点があげられるが、それを可能にしたのは、沾徳と調和の関係があったからではないだろうか。次に調和と沾徳の関係を考えたいと思う。沾徳の作品が入集する調和系俳書は次の通りである。

- ◇延宝七年（一六七九）『富士石』（調和編）発句五句
- ◇延宝八年（一六八〇）『金剛砂』（調和編）発句二句
- ◇天和三年（一六八三）『題林一句』（調和編）発句三句
- ◇貞享二年（一六八五）『白根嶽』（調和編）発句一句
- ◇元禄十一年（一六九八）『面々硯』（和英編）歌仙一座
- ◇宝永元年（一七〇四）『分外』（艶士編）発句一句、歌仙一座
- ◇宝永五年（一七〇八）『万句短尺集』（和英編）百韻二巻に一座

◇宝永六年（一七〇九）『宮城野』（拾詞編）発句三句

◇正徳三年（一七一三）『把管』（風和編）発句一句

沾徳の作品が初出するのは、延宝六年『江戸新道』（言水編）である（門田沾葉の名で発句二句）。その翌年に沾徳は調和の俳書に入集する。沾徳の動きは、延宝七年より貞享二年までの間、左記の調和系俳書に入集する程度であるが、以後芭蕉門と交流するなど活発になる。貞享二年以後の両者の関係は全くなかったわ

けではないが少ない。

注目されるのは、宝永五年『万句短尺集』中で調和一派とともに沾徳及びその高弟である沾洲が一座していることである。というのは、前述したごとく前年に調和一派が『つげの枕』を刊行して洒落風を攻撃しているからである。そのような対立があった後、調和は沾徳に誘いをかけ、沾徳はそれに応じている。このことは両者の歩み寄りという問題ではなく、沾徳は調和門から俳諧活動をはじめ、その関係が後年になっても影響を及ぼしたからではないだろうか。沾徳は調和からの誘いには応じるが、沾徳から調和への働きかけはなかったものと思われる。というのは沾徳が編集する俳書には調和の作品が収録されていないからである。ちなみに調和と其角との関係は見られない。

以上のように調和は沾徳と少ないながらも接触し、没交渉ではなかった。そのことが、和推が沾徳に接近することを容易にしたのではなからうか。

#### 四

享保元年（一七一六）『江戸筏』（風葉編）が刊行された。それは江戸俳人二十三名の独吟歌仙を収録し、各歌仙の巻末に沾徳の判を付すものである。その序文には次のように記されている。

元禄の季、其角、門人の巻々を括て自評をくはへ『うら若葉』と名づく。其後、合歡堂『余花千句』に鼈頭をそへて世に句ふりを知らせ侍りてより己来、他国の俳も粗これに移りたるといへども、尚又江都の風流日々新たなれば、風葉のぬし、未の秋をのく、独吟を筏にくみて、徳叟一判の藻鑑を

要して、今の新古を音信待ることを、此に沾洲述。(傍線筆者、以下同じ)

独吟歌仙の巻末に判をするという形式は、其角の『末若葉』(元禄十年)を踏襲するものである。沾洲は、『江戸筏』を『末若葉』『余花千句』に続くものであると位置づける。とりわけ傍線部分では、江戸の俳風が日々変化しているという流行意識を強調する点に注目できる。和推はこのような流行の先端と認識された『江戸筏』に、他の江戸俳人とともに肩を並べている。

享保六年(一七二二)に刊行された『後余花千二百句』(沾徳編)では百韻八巻に一座しており、和推は、宝永二年以後順調に滑りだし、沾徳の勢力下に組み込まれていったことが確認できる。

享保十一年(一七二六)五月沾徳が没した後、沾洲が後継者となり、和推は沾徳に引き続き沾洲とも関係を保つ。和推と沾洲との関係は、『百千万』(享保十年、沾洲編)に和推の作品が収録され、『統江戸筏』(享保十五年)では和推の独吟歌仙に沾洲の判を受けており、その親密さが推察できる。また、沾洲の歳旦帳に和推が入り、正徳三年、享保四年、享保六年、享保二十年のものが確認できる。「宗匠組合意識が組織化されるのは、沾徳没後、沾洲を中心におすすめられた<sup>注)</sup>」が、和推も組織化された宗匠の一人と考えられる。

和推が沾徳門と深く関係することを証明する和推側の資料としては、和推の歳旦帳があげられる。享保十一年「丙午年賀」を取り上げると、そこには四十四名が収録されている。そのほとんどは和推門と思われるが、中に「沾器、沾写、沾叔、沾隣」などの沾徳門が交じる。宗匠レベルでは「雨橋、山夕、青岬、沾洲、沾

徳、貞佐、白雲」が数えられる。ここに和推の交流範囲が浮上する。

和推の作品が収録された俳書の編者を師系別に分けると左記のようになる(番号の下の数字は入集俳書数)。

①其角門 渭北1・永機1・格枝2・祇空1・湖十3・貞佐

7・秋色1

貞佐門 超波1・有佐1・平砂1

祇空門 楼川1

嵐雪門 拾翠1・朝叟1・吏登1

杉風門 風葉(宗瑞)1

園女2・見龍(支考)1 其角嵐雪門 宋阿(巴人)1

②沾徳門 沾徳3・沾洲6・沾石1・沾山3

二世青岬門 百庵1・米仲1

沾洲門 常仙2・羊素1

露月12・沾涼1

③貞徳門? 貞山1・芦鶴1、立志門玉全1・立詠2、無倫門倫

理1・来川1、玄札門山夕6・仙水2、風水門松峰1、盤谷

門尾谷1

④調和門 調和3・艶士1・常陽1・里風2・和英3・聴雨

1・和葉1

不卜門 不角1

和推は沾徳一派に接近することを契機として、その活動範囲を其角門、嵐雪門、その他の門流へと拡大していった。

当時の江戸俳人は、一部を除き江戸を本拠地として活動していたと考えられる。そのような例にもれず和推も江戸に定住した都

会型の俳人であったと認められる。それは、和推の作品が収録される俳書ほとんどが江戸俳人の編集によるものであり、江戸以外の地域では、京都の練石、竹宇、北越の可祝、越前の沾耳（露沾門）、名古屋の東鷺、調和門では風和（最上の神官）、宮城野住の拾詞などが数えられる程度だからである。練石は師の鞭石の追善集を、竹宇、可祝、沾耳、東鷺、風和は、各々旅中江戸に立ち寄ったことを記念して編集を企画したと各書に記す。

## 五

和推は沾徳傘下に入る一方、調和との関係も維持する。洒落風に従いながら化鳥風側である調和と師弟関係を継続することは、和推の立場を複雑なものにしたと思われる。以下において和推の調和門での動きを考えたいと思う。

元禄時代後期以後に調和系俳書として刊行されたものは左記の通りである（和推の作品の句数は括弧内に記した）。

◇元禄十年（一六九七）『夕紅』（調和編）歌仙一卷

◇元禄十一年（一六九八）『面々硯』（和英編）百韻一卷

◇元禄十五年（一七〇二）『歳旦』（調和編）三物三組

◇宝永元年（一七〇四）『歳旦』（里風編）表八句、『分外』（艶士編）歌仙一卷、発句二句

◇宝永五年（一七〇八）『万句短尺集』（和英編）百韻五、歌仙一卷

◇宝永六年（一七〇九）『梅の露』（風和編）歌仙一卷、発句四句、『宮城野』（拾詞編）発句一句

◇宝永七年（一七一〇）『歳旦引附牒』（調和編）三物二組

◇正徳三年（一七一三）『把管』（風和編）歌仙一卷、発句四句

◇正徳五年（一七一五）『調和追善集』（和英編）連句（十六句）、発句一句

◇享保五年（一七二〇）『これまで草』（和葉編）四吉一卷、発句七句

和推の作品は、このような当時刊行された調和系俳書のすべてに収録されている。調和の没後「反故捜し壁の中にも枇杷の花」（『調和追善集』）と追悼句を手向けている。沾徳傘下に入ったとはいえ、和推が調和門人であることに支障はなかった。

## 六

「正徳・享保の頃世は一面に沾徳の附合点取流行して」（『在りし世語』寛政七年刊 烏明編）といわれるごとく沾徳の俳風が横溢していたが、以下において沾徳の俳風について考えたいと思う。「江都の風流日々新たなれば」（『江戸筏』序）今の俳風を示す必要が生じる。「今の俳風」を意識することは、沾徳が、次のように述べていることにより理解できる。

発句ハ新古是非なし。是に草花もとめて今の俳風となして世にあらハす事となりぬ。（『俳諧枝葉集』自序、正徳元年）

そのような姿勢は、沾徳一派にもゆきわたる。例えば、

①今の俳諧只人の跡をしたふ事ばかり多し。新来の作者は古き事をしらず今の俳風の中にて先作をしたひ、古来の作者は今の風をしらず己が俳の古くなりしを今も如此かとおもひていひあそぶ。両様ともにとる所なし。古くして古からざる句作

あり。是を証としたし。新しくして古き句もあり。難好時節  
くゝの句のかたぎをしるといふが達人なるべし。然上余花千  
句に出せし頭書のごとくに又あらはず。今を弁へしらむ一助  
ともならん歟。(『後余花千二百句』享保六年 徳純序)

②右二十七歌仙に一評をうけ、続江戸筏『享保十五年 松葉軒跋』  
風なるべし。(『続江戸筏』享保十五年 松葉軒跋)

などである。時代とともに作品に対する人々の嗜好が変わること  
を前提として「今の俳風」を自覚する必要を説く。しかし「今の  
俳風」をそのまま肯定しているのではなく、「今の俳諧只人の跡  
をしたふ事ばかり多し」という反省も忘れていない。

①の傍線部分にあるように、句作の新古は、時代の移り変わり  
によるものではなく、古めいていても新しさを備える句があり、  
最近の句であっても陳腐な句があるという認識をもつ。沾徳は、  
句の「新古」にのみ拘泥することを、

一向に新古の場斗恐れて、新らしき場とのミ按ずる処にハ、  
はや古き場ある也。新らしきとむかふ心早古き也。(『文蓬  
菜』元禄十四、五年 沾徳編)

と述べて否定する。意識的に新しさを追究することに古さを嗅ぎ  
分けることは、

一句一句に当意の作のはたらく物あれば、古きともおぼえず。  
又新らしきとも覺ずして、則中にあたらしき物ある也。(『文  
蓬菜』)

とあるごとく、作意の働きを重視する立場に拠るものと思われる。  
新古を超越したところに「今の俳風」を認めようとする。

このように「今の俳風」を推進するのであるが、享保時代に入

ると行き詰まりが生じてきたのではないだろうか。沾徳は、

今年十三年來俳風かハらず、時にしたがひ柑梨橘柚の似て似  
たる味ひ少のたがひ有斗、竟万事とゞまるといふ事なき事を、  
古き作者ハ古きにとゞまり、今の作者ハ今にとゞまる。今に  
止りてとゞまらぬを今の俳におゐて就中貴き所として、旧知  
の作者近年の作者、但にをしまじへて俳集一編となす。(『成  
九十三回忌』享保三年 朝叟編 沾徳序)

と述べる。「今に止りてとゞまらぬ」を「貴き所」と言うが、傍  
線部分に俳風の停滞を認める言葉が見える。享保三年(一七一  
八)から十三年前は宝永二年(一七〇五)にあたる。宝永二年は  
沾徳が「江都の風」(『余花千句』)を示した年である。それ以後  
俳風の停滞が認められると考えていたすれば、沾徳は自己の俳風  
の限界を少なからず感じていたのではなからうか。

享保時代も末になると、「其角 沾徳が洒落世に用ひられて三  
十四十年をかさねて諸国の俳風となれり」(『魚のあぶら』享保  
二十年 徳雨編)と洒落風が都鄙にゆきわたったことを一応認め  
るものの、

然れども風躰、元禄の句ハ宝永にふるび、宝永正徳の句ハ享  
保にあらたまり、既に徳叟没前之句ハ享保はじめの句風にあ  
らず。或ハ源氏伊勢物語の意味にもとづき、史書漢文によれ  
るも力足らざるが故か、次第に嫌ひ、いひかけもはやらず、  
譬喩といふ名をもて句を難じ。(『魚のあぶら』)

と次第に流行しなくなり、譬喩俳諧と批判されるようになったこ  
とが沾徳門内部で問題となっている。

沾徳は宝永二年以後「今の俳風」を諸国にひろめ「万国の俳士



は江都の相場を苦吟(『百千万』)するようになったが、享保末年になりようやく衰退の兆しを見た。その間のいわば沾徳一派の黄金期ともいえる時期を、和推は沾徳の勢力下に過ごした。

## 七

和推の発句を一覧すると、景気の句は少なく、

山吹に小網もどかしき小あゆかな(小弓誹諧集)

雪むしろ鴨の羽色や今朝の春(梅の露)

枇杷の花ほのく見えつ瓦竈(把苜)

新月や凛々として箔尽し(これまで草)

など素直な叙景の句は、調和系俳書に収録される。それに対して後期の作品は、

瀧垢離の男うらやむあつさ哉(続花摘)

黄昏や紙燭せずとも梅の花(絵具皿)

松竹に因ミを付し梅の雨(上戸の雪)

など景気の句であっても、夏の暑さを「瀧垢離の男うらやむ」と説明したり、梅花の白さを黄昏であっても紙燭をともしなくともほんのりと明ると詠んだり、梅に降る春雨を松竹梅という取り合わせから「松竹に因ミを付」すと表現するような理屈のかけた句作りをしている。また、

行年ハ何もいは戸の関破り(常仙歳旦)

に見えるような「何も言わ<sup>レ</sup>ない」と「天の岩戸」を掛詞にしたような技巧的な句作りをする。

以上の句は「俳諧を理知的技巧的に取扱おうとする」<sup>(注10)</sup>沾徳の影響を受けたものと思われる。都会風で趣向を凝らした点に特徴が

あるといえよう。

和推の連句については、発句と同様に、調和門中で活躍していた初期の頃と、沾徳に接近した後では、俳風に変化が認められる。例えば、『夕紅』(元禄十年 調和編)に収録された歌仙では、

是当人を式部喪の内

不角

いとせめて水に絵を書眉根掃

和推

という付句がある。喪の内なので華美な化粧はできず、せめて水に眉の形を描くという意である。前句の「喪の内」を水に眉根掃をする理由ととらえる。句意が平易で、前句との付合も穏やかである。前句の雅な女官を想像させる「式部」、付句の「眉根掃」という女性の化粧道具に上品な恋の情が読み取れる。「俗語の連歌」(『原俳論』)と評される俳風に近いといえようか。

それに対して『江戸筏』に収録される和推の独吟歌仙では、

中々に羽織は葛の裏吟味

生キ胴を買武士のまつ昼

とある。この付句は、最高の点である「余毫」を付けられている。前句の「羽織」から「武士」を連想したものと思われるが、歌語としての「葛の裏見(恨み)」を恋の呼び出しとして、「羽織の裏まで気を遣って昼見世へ来た武士」を描く。前述した句と同様に恋の句であっても、一方は胸に秘めた恋情をある仕草に託して表すのに対して、一方は現実を享樂的に生きる姿を赤裸々に描いている。新刀をためすために死罪人の死体を切る意の「生キ胴」という奇抜な語を、遊女にとりなして恋の句とする点に趣向の働きがある。それはまさしく「当意の作のはたらく」(『文蓬萊』)句であり、そこに高点を付けられた所以がある。

以上のことより、和推は発句連句ともに、意識的に俳風を変え、調和風から離れて沾徳風に従ったと考えられる。

## 八

以上元禄後期より享保末年に至る和推の動きを見てきたが、和推は、沾徳の台頭とともに沾徳の勢力に吸収され、以後順調に俳諧活動の基盤を作っていた。その一方で調和門とのつながりも維持しつつ、最終的には調和二世を名乗った。和推は、沾徳の勢力に組み込まれながら、調和門としての立場を失わなかった。

そのような和推の動きは、現在からすれば、矛盾したもののように受け止められるが、当時においては許容範囲にあったのである。当時の江戸俳壇の特色としては、第一に、沾徳を中心として其角門、嵐雪門、その他の門流の俳人を寄せ集めて俳壇の編成が行われたこと、第二に、沾徳風の「今の俳風」に従ったこと、第三に、各門の師系を認めつつ、洒落風の間では比較的自由に交流が可能であったことなどが考えられる。

すなわち、享保期江戸俳壇は、俳系よりも俳風（今の風）を重視し、俳風を中心にまとまりを見せた寄り合い世帯のようなものであったと思われる。従って、俳風に行き詰まりが生じたときに五色墨運動に見られるような新風（蕉風復興）が発生し、やがて俳壇が再編成される余地を内包していたのではなからうか。

## 注

注1 石川真弘氏「元禄後期江戸蕉門の様相 享保俳諧史序章」（『蕉風

論考』平成二年）

注2 今泉準一氏「中村少長追善句集」の「こる露」（『連歌俳諧研究』二十五号 昭和三十八年）

注3 「統俳諧論戦史」（『頼原退蔵著作集』四巻 昭和五十五年）

注4 鈴木勝忠氏「水間沾徳・貴志沾洲」（明治書院版『俳句講座』三巻 昭和四十四年）

注5 白石佛三氏「水間沾徳年譜」（『連歌俳諧研究』十九号 昭和三十四年）

注6 宮田正信氏「雑俳の前句付の成立」（『雑俳史の研究』昭和四十七年）

注7 「享保俳諧の三中心」沾徳の項（『頼原退蔵著作集』四巻 昭和五十五年）

注8 鈴木勝忠氏「江戸座俳諧集」解説（『古典文庫』昭和四十二年）

注9 注5に同じ

注10 注7に同じ

注11 新日本古典文学大系「江戸座点取俳諧集」所収「江戸筏」脚注（平成三年）

## 付記

本稿は、第四回神戸大学文学部国語国文学会における口頭発表を骨子としました。席上及び発表後、御教示を賜りましたことを深謝申し上げます。本稿を作成するにあたって、科学研究費補助金（特別研究員奨励費）を受けたことを明記致します。

（日本学術振興会 特別研究員）